

## 【講義 10】幕末明治の出版文化

山本 和明

### 一、はじめに 近世後期・幕末明治期の出版概観

#### 【1】近世後期

十八世紀半ばになると、それまで京や大坂が出版の中心であったものが、物流など、経済圏の発達にともなって江戸が出版の中心地となって栄え（いわゆる「文運<sup>ぶんうん</sup>東漸<sup>とうぜん</sup>」現象）、全国を市場として書物が流通していくことになる。商業出版の隆盛により、後期出版の物量は前期と比較にならぬものがあり、幕末にかけての残存率も高くなっていく。大学・公共図書館等において、通常「和古書」として取り扱われるのは、多くこの間の出版物である。

#### 〔地本とは〕

近世前期またはそれ以前に原型があり、堅実に増刷を繰り返す素性の正しい「物の本<sup>ものほん</sup>」（宗教書・和漢の学問書・医学書など）に対し、江戸出来の書物として、特に大衆向けの洒落本<sup>しゃれぼん</sup>・草双紙<sup>くさざうし</sup>（赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻）・読本<sup>よみほん</sup>・滑稽本<sup>きげきほん</sup>・人情本<sup>じやうじんほん</sup>・咄本<sup>でうほん</sup>・狂歌本<sup>きやうかほん</sup>といった草紙類を、ローカルな出版物という意味の「地本」という名称を以て行われた。この「草紙」の入れ替わりの早さが出版全体の活性化を招いた要因のひとつという（橋口侯之介『和本への招待』第五章、角川学芸出版、2011）。

※地本の様々な名称について：この類の書物を文学史的に厳密に分類して把握しようとしたのは、明治以降のこと。例えば「人情本」「滑稽本」など、当時は「中本」として括られていた。我々が用いるこの種のジャンル名は、いわば近代になって選び取られた名前にほかならないことも注意しておきたい。

近世の書物を考える上で、本には格付<sup>ランク</sup>があったことは、その本の大きさ（大本・半紙本・中本・小本等）、紙質の違いなどからも理解出来るが、格の高い「物の本」を扱うのが書物問屋。享保六年（1721）には、京・大坂・江戸の三都で「書物問屋仲間（本屋仲間）」という、自分たちの權益を守る組合が組織され、仲間内で開版（版木に彫り出版すること）予定の原稿について、町触<sup>まちふれ</sup>等への違反の有無をチェッ

クした上で、町奉行所に出版許可を受けていく自主検閲制度が確立されている。

一方の、絵草紙など「地本」を扱うのが地本問屋。書物問屋の対語であるが、両者を兼業するものも少なくなかった。寛政二年（1790）十月、広く売り捌かれていた草紙類の出版規制強化のため、地本草紙を扱う本屋に対し、自主検閲組織確立を盛り込んだ内容の申渡し<sup>さば</sup>がなされ、「地本問屋仲間」が結成される。「地本」の類、すなわち芝居関係の本や「江戸戯作<sup>げさく</sup>」とよばれるものの殆どを含む草紙類からは、曲亭馬琴、山東京伝、為永春水などの人気作家を輩出し、近世後期は完全にこの「地本」が出版業界を席卷し、書物が江戸のみならず全国津々浦々にまで浸透していくのである。

書物を本屋仲間での正式な手続きを経て出版すると、それを出版した本屋には株<sup>かぶ</sup>（＝営業上の権利）が派生し、板木を売り払わない限り、原則その本屋に属することになる（いわゆる版權）。流通範囲の拡大にともない、十八世紀後半からは、複数の本屋で共同出版する事例が増えているが（相合版<sup>あいあい</sup>）、これは商業出版としてのリスク回避の手段であり、また書冊を売り捌く上での流通網の拡大という側面もある。

## 【2】規制と書物

近世という時代は、幾度か「改革」という名のもとに出版への干渉が行われているが、「本屋仲間」が組織として対応し、内部で自主規制をしながら幕府（奉行所）の直接的な介入を回避してきた。

たとえば、松平定信は寛政二年（1790）五月「町触」において、風紀引き締めとして、出版物における世相批判や好色物の禁止などを打ち出す。内容は享保の改革時のお触れと変わるものではなく、あたかも間欠泉の如く噴出した規制である。だが、寛政三年に作家山東京伝と版元蔦屋重三郎が洒落本出版をとがめられ処罰されたのを契機に、洒落本の出版が回避され、黄表紙も内容を歴史や仇討を描くようになり、長編化して合巻化されていく。江戸読本（一例：曲亭馬琴『南総里見八犬伝』）や人情本（一例：為永春水『春色梅児誉美』<sup>しゅんしよくうめごよみ</sup>）などが趣向も新たに出版されており、規制に対し、書肆は売れ筋を模索するのである。

また、寛政の改革の一環として幕府が朱子学以外の学問の講義を禁止した学制改革（寛政異学の禁）により、昌平坂学問所を中心に儒学が興隆し、「物の本」においても江戸の書肆が優位に立ち出版することになったことも留意しておきたい。

### 〔本屋仲間の解散〕

同様の規制は天保の改革時にも行われたが、特に留意したいのは「株仲間」の解散の一環として本屋仲間が解散させられたということである。その意味するところ

について確認しておく。

天保十二年（1841）十二月、天保の改革の一環として株仲間解散令がなされた。株仲間の解散は営業や流通を自由化し、競争原理を導入することによって、物価の引き下げを実現するものだったが（藤田覚『天保の改革』吉川弘文館、1989）、このとき書物問屋仲間・地本問屋仲間も解散することになる。このことは出版において多大な影響を及ぼした。すなわち板株が無効となったのである。板株とは、出版権（版權）のことであり、板株を有した版元は、同内容の書籍を出版する重版や類似内容の書籍の出版（類版）に対し、異議申し立てが出来、問屋仲間の行事が関与することで統制されてきた（作者の権利を主張する著作権ではない点も注意しておきたい）。書物問屋仲間・地本問屋仲間の解散によって、<sup>ぎょうじあらため</sup>行事改がおこなわれなくなった。本屋仲間の解散により、検閲は昌平坂学問所と町奉行所が行ったが、従来のように書肆は板株を主張することが難しく、読本抄録合巻など多くの類版が出版されていく（佐藤至子『江戸の出版統制』吉川弘文館 2017）。

嘉永四年（1851）三月、株仲間が再興され、書物問屋仲間と地本問屋仲間も復活するが、この間に出版業への新規参入組が増え、地方における読者層の増加と重なり、初心者向けの書物が増大する。往来物（書道手本・書簡文例集）や儒学などを仮名でやさしく解説した注釈書など、従来ならば重版・類版を考えねばならなかった書物も一気に普及したのである。

### 〔合巻への規制 色・役者絵〕

天保十三年（1842）六月の町触では、出版手続きの一部修正などが示されたが、注目すべき点は、合巻などの草双紙に、役者似顔や芝居の趣向を描くことを禁じ、表紙・袋における多色摺を無用とし、忠孝貞節や勧善を意識した内容への転換を求めるものであったことである。天保十四年新版の合巻はきわめて少なく、書名に「忠孝」「教訓」「勧善」などをうたう作品が目立っている。華美であることが風俗を乱すもとの考えに基づく。それまでに刊行された長編合巻（長編化もこの時期の特徴であるが、これはヒット作の継続を求める書肆の需に拠るところが大きい）も、表紙を地味な意匠にし、口絵・挿絵の人物の顔を改修（埋木による）するなどして販売されているのである。合巻などを研究する上では、同一書名であっても他本との比較検討の上で、本文等をよく確認してかからねばならない事情があり、書誌事項記載において、可能な限り情報を注記していただきたい。

### 【3】娯楽の提供者・貸本屋

近世後期にあつては、庶民の多くは、往来物など一部の書物は別として、書物は

購入するものというよりも、貸本屋を介して、借りるものであった。近世の書肆（本屋）は出版・小売・古書販売を兼ねるものであったが、近世後期になると大手貸本屋が出版に関与してくることになる。読者の要望を反映した出版をすることは、書肆にとってもリスク回避をする上で重要なことであった。特に読本など豪華な装丁の本や人情本・滑稽本などは、庶民は貸本屋で借りて楽しんでいる（草双紙は個人でも購入）。家に書物を所有することが、ステータスを表す時代でもあった。

#### 【4】明治初期

1868年に幕府は終焉を迎え、混沌としたなかで新たに明治という時代を迎えた。欧化政策、富国強兵、殖産興業など、この時代を彩る言葉は多いが、こと出版という側面で見ると、何が言えるのか。

維新とともに学問の体系が西洋理解へと急激に変わり、神仏分離・<sup>はいぶつきしやく</sup>廃仏毀釈といった動きの中で、それまで出版活動を支えてきた儒学書・仏書の需要が激減していく。蘭語にかわり英語の翻訳書も増大し、化学や西洋医学、数学などの理数書、海外の地理や動向を知る書冊が増えていく。特に明治五年（1872）に近代学校教育制度の基本法である「学制」が公布されて以降、教科書ならびに関連書目の需要が高まり、他を圧する勢いであった。印刷も次第に西洋式の活版印刷が普及してくるため、従来の版木を所有することで成立してきた株（版権）が無意味となっていく。本の需給関係が乱れていき、近世以来の版元が急激に没落し、新たな執筆者を差配できる、新興の書店が出版界をリードするようになる。和装から洋装へ、木版印刷から活版印刷へ、という生産過程の変化は、従来書物を製作するに必要であった彫師・摺師といった技術者の確保を要しない家内工業的な出版を可能とした訳で、出版物の形態にも大きな変化をもたらしていく。洋装本を真似たボール表紙本なども数多く刊行されている。

規制もまた大きく変化する。これまで述べてきたように、幾度か「改革」の名のもとで出版への干渉が近世期にはおきていたが、おおむね、「仲間」内部で自主規制をしながら奉行所の直接的な介入を回避してきた。しかし、明治八年（1875）九月に、「出版条例」が制定・発布されたことで、直接内務省による検閲がなされる体制へと移行するのである。明治二十年（1887）には出版条例・新聞紙条例の改正などがなされ、新しいメディアである新聞などにも様々な形で統制がなされていく。出版社は開業に許可はもらわないが、個々の出版物ごとに内務省の検閲を受ける必要があった。書物に示された情報は、その折々の制度に従い、記述することを余儀なくされたのである。

## 二、留意すべきこと

高木元が「わが国の書誌学の伝統の中で、近世後期の製板本とりわけ挿絵入本については、比較的軽視されてきたといってもよいだろう」（『読本の書誌をめぐって』『讀本研究』第四輯上套、溪水社、1990）と指摘したのは四半世紀ほど前になる。以後、近世後期の書物、特に絵入本に関しては、まだまだ十全たる所在調査・研究がなされているとはいいがたい。

たとえば、日本のナショナル・カタログと言える『国書総目録』は、慶応三年（1867）までに日本人が編著した書籍およそ五十万点を収めた総合目録であり（各機関発行の冊子体目録よりデータ化）、書名・著者名・成立年とともに、それぞれの書冊の所蔵者のリストが掲載される。昭和三十八年（1963）から岩波書店で刊行され、それを継承し当館編『古典籍総合目録』が刊行された。現在「日本古典籍総合目録データベース」「新日本古典籍総合データベース」という形で Web 公開され、今なお登録数が増えている。ただ近世後期の絵入本（特に草双紙）は、そもそも公的機関で所蔵されてこなかった経緯がある。価値を見いだしていなかったのである（このことは、明治初期の所謂「ボール表紙本」などに対しても今なお存する価値観である）。そのため今なお国書総目録未載の本が数多く古書肆の目録に掲載される。近年、そうした草双紙についても評価され（このことはデジタル化により書物等に写真掲載が容易になったことも影響している）、個人の寄贈等がなされつつあるが、それでも揃本での収蔵は各機関とも甚だ少ない。だから正確な書誌の記載が研究者には貴重な情報源である。端麗な絵入小説は、内容の変化を伴いながらも、十七世紀末から十九世紀末に至る長い歴史を保有しており、海外からの評価も高いことを理解しておくべきであろう。

近世期の草双紙は、五丁を基本単位とした中本サイズで、ほぼ全丁に挿絵が入り、その挿絵の余白にひらがな文字が埋められているという板面をもち、草双紙の一貫した特徴であった。明治期の合巻については、特に顕著な特徴として化学染料（鉋物系）による表紙絵、その多くが九丁三冊で一編を成し、三編九冊読み切りが基本となったことを挙げることが出来る（上下二冊読み切りも多い）。本文の字が大きくなり、漢字ひらがな交じりで、ついには、金属活字による版面にとって変わられ、絵と文字の分離がなされるようになった。また新聞の普及により新聞広告により情報を入手しうる等々の周辺の変化をみてとることができる。

## 《参考コラム》奥付に記載すること（明治時代）

谷川恵一 ※一部改変

奥付にどのようなことを記載するのかについては、出版に関する法令の規定によった。それぞれの時期によって揺れがあるものの、一般に、明治になってからは法令による縛りは江戸期よりは厳密になる。

維新直後の明治二年五月に出された明治新政府最初の出版条例は、出版物にはかならず「著述者出版人売弘所ノ姓名住所等ヲ記載ス可シ」と定め、また当局が出版を許可した月日もあわせて記しておくことを求めている。続く明治五年の出版条例でも先の規定から「売弘所」を除いたものがそのまま受けつがれた。

これらの条例で「姓名」というのは、明治二年の出版条例が「出版願書雛形」で「著述者或ハ翻訳者身分姓名印ノ住居」の記載を求めたことに示されているように、政府に届け出る公の姓名であり、文筆家として用いるペンネームや書肆の堂号などではない。

明治八年に改められた出版条例では、こうしたことをより厳格に定めている。

第二十一条 出版ノ図書ニハ著訳者ノ住所氏名ヲ記ス。著訳者ノ主名ヲ知ルベカラザル者ハ其由ヲ記スベシ。而シテ何年月日出板或ハ何年月日板権免許ト記シ、板主ノ住所氏名ヲ記スベシ。氏名ヲ記セズシテ別号ヲ記スルコトヲ得ズ。

島鮮堂綱島亀吉が、明治十三年（1880）に刊行した岡本起泉の『沢村田之助 曙草紙』<sup>さ は む ら た の す け あ げ の</sup>では、袋・表紙・自序いずれにおいても「岡本起泉綴」とあるのに、各冊ウラ見返しの広告に附載された刊記ではやはり「麹町区一番町六十一番地編輯人岡本勘造」と記しているところには、条例への配慮をみなければならない。

明治維新をはさんで活動した戯作者の場合、こうした違いがより顕著に現れることがある。弘化二年(1845)刊行の初編から明治四年(1871)の五十八編まで書き継がれた万亭応賀の合巻『釈迦八相倭文庫』<sup>しゃ か は っ そう や ま と ぶ ん こ</sup>は、六十五編までの残りを書き足して、ようやく明治十八年に辻岡文助によって出版された洋装合本版で完結することになるのだが、五十八編までは表紙・見返し・自序などに「万亭応賀著」「万亭応賀作」「応賀作」「万亭応賀識」などとあるだけだったが、明治十八年の金松堂版では扉には「万亭応賀先生著」とあるものの、奥付では「編輯人静岡県平民服部応賀」と本姓を記していた。明治維新を境に「万亭応賀」から「服部応賀」へ変わった訳である。明治七年の『権兵衛種蒔論』は、表紙と内題の次行に「服部応賀著」と記すだけで、「応賀」という名は表紙の著者名の下に「卍亭」という印記にわずかに残るだけである。新聞の出版広告（読売新聞、明治八年五月一日）でもやはり「服部応賀著」となっていた。

それまでの出版条例における版權の関する規定を版權条例という別の法令に分離する形で、明治二十年十二月にあらためて公布された出版条例は、著者の氏名の記載を求めなくなっただけでなく、新たに印刷に関する事項の記載を義務づけたことによって、奥付に大きな変化をもたらすこととなった。

明治二十年の出版条例以前は、あくまで本への実名の記載を要求する。「春のや朧先生戯著」(『当世書生氣質』二冊合本版の見返し、明治十九年四月)、「東海散士著」(『佳人之奇遇』再版の題簽)などとあったとしても、奥付ではそれぞれ「坪内雄蔵」「柴四朗」と記されていたのだが、二十年条例以降になってからはじめて「蝸牛露伴著」(『葉末集』奥付、明治二十三年九月)、「著作者 幸田露伴」(『いさなとり』上編の奥付、明治二十四年十一月)など、本名ではなく筆名による著者名の記載が出現するようになるのである。

### 三、レファレンス・ツールについて

以下、幕末明治の出版物を考える上で、簡便に参照しうるレファレンス・ツールについて紹介することとしたい。

【ツール類】(2019/06/20 閲覧確認)

#### 《表紙模様》

○表紙模様集成 <https://www.nijl.ac.jp/pages/images/hyousimonyou.pdf>

#### 《改印・極印》

幕府の錦絵・絵草紙取締り印

浮世絵や草双紙に刻された印のなかに、刊行の際に検閲を受けた証である「改印」がある。江戸の浮世絵版画や草双紙類は地本草紙問屋、団扇絵は団扇問屋から刊行された。それらは他の問屋と同様、江戸町奉行の支配下に入り、改印の制度は町奉行の指令によって行われた制度である。改印制度の起源、改印が刻されるようになった時期については未詳部分が多いが、寛政三(1791)年春刊の錦絵・版本に改印の一種である「極」印がみえ、以後ほぼ連続的に作例を見出せるため、この頃から始まるとするのが定説化している。寛政二年に寛政改革の一環として出された布令に「行事改候而」「行事改を不用者」などの語句がみえ、作品上に現れて来る時期とほぼ一致する。そこから八十六年後の明治八年九月三日に明治政府により新出版条例が發布されて、出版物には発行年月日が明記されることになり、錦絵・草紙類の改印制度は終焉を告げた。この間の書物の年代を知る手がかりである。

検閲が行われる際の定められた手続は、版元が版下の段階で行事（または名主）に提出し、行事（または名主）は発行差支えなしと判断すればその版下に改印を捺して返す。版元は改印をそのまま刻させて摺出するというのが通例であった。

『錦絵の改印の考証』 石井研堂

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1191479> (図書館向けデジタル化資料送信サービス 図書館送信)

浮世絵ぎゃらりい

<http://www.ukiyo-e.jp/aratamein/>

※Web版ではないが『原色浮世絵大百科事典』第三巻（大修館）も便利

《出版年表》

『日本小説年表 附・総目録』 山崎麓編（近代日本文学大系第25巻所載）

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1143685>

『享保以後大阪出版書籍目録』

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1815083>

『享保以後江戸出版書目』 (図書館向けデジタル化資料送信サービス 図書館送信)

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2935059>

『明治初期戯作年表』

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1875571> (図書館向けデジタル化資料送信サービス 図書館送信)

<https://ja.wikisource.org/wiki/利用者:Kzhr/明治初期戯作年表>

《出版社・版元》

「国立国会図書館所蔵幕末・明治期錦絵・摺物等の版元・印刷所一覧（稿）」

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3051398>

『東京書籍商組合史及組合員概歴』

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/949275>

「全国書籍商名簿」

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/900109>

「特選書籍商名簿」

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1089699>

《画師》

浮世絵文献資料館

○浮世絵師総覧 <http://www.ne.jp/asahi/kato/yoshio/frame.html>

○浮世絵事典

<http://www.ne.jp/asahi/kato/yoshio/ukiyoeyougo/ukiyoeyougo-frame.html>

○版本年表一覧



<http://www.ne.jp/asahi/kato/yoshio/hanponnenpyo/nenpyou-menu.html>

## 《その他》

高木元「ふみくら」

<https://fumikura.net/>

■研究資料①『類集撰要』巻之四十六（旧幕引継文書 巻 46 は「書物・暦・錦繪・書物屋・板木師」）／②「切附本書目年表稿」／③「山東京山著編述書目稿」／④『浄瑠璃作品要説』索引（国立劇場芸能調査室編『浄瑠璃作品要説』1-8 索引）⑤「歌舞伎役名索引」（土田衛氏編の翻刻台帳の役名索引を構造化したもの）ほか  
○中本型読本年表稿

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/kinseibungei/44/0/44\\_55/pdf-char/en](https://www.jstage.jst.go.jp/article/kinseibungei/44/0/44_55/pdf-char/en)

玉淵叢話（三木佐助）

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/782038> （782039・782040）

近代文献情報データベースポータル

○「近代書誌データベース」「近代画像データベース」

現在の登録データ件数 書誌約 39,402 件、画像約 5,656 件

<http://school.nijl.ac.jp/kindai/>

○「明治期出版広告データベース」

現在の登録データ件数 広告約 98,330 件

[http://base1.nijl.ac.jp/~meiji\\_pa/](http://base1.nijl.ac.jp/~meiji_pa/)

○近代文献調査マニュアル

[www.nijl.ac.jp/pages/images/youryou\\_kindai.pdf](http://www.nijl.ac.jp/pages/images/youryou_kindai.pdf)

## 参考文献

本講を執筆するにあたり上記記載のもの他に、次のものを主として参照・引用・抜粋利用した。

○誠心堂書店エッセイ

<http://www.mmjp.or.jp/seishindo/essay/index.html>

○中野三敏『書誌学談義江戸の板本』岩波書店、1995

○堀川貴司『書誌学入門』勉誠出版、2010

○木村八重子『草双紙の世界』ぺりかん社、2009

○日本出版学会関西支部『出版史研究へのアプローチ』出版メディアパル、2019

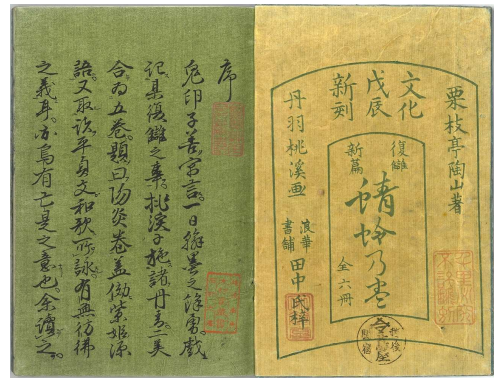
参考図版



絵草紙屋（長崎大学図書館蔵）



江戸土産之内 絵さうし店



例) 読本



合巻（表紙）



合巻（見返し）



合巻（巻末）



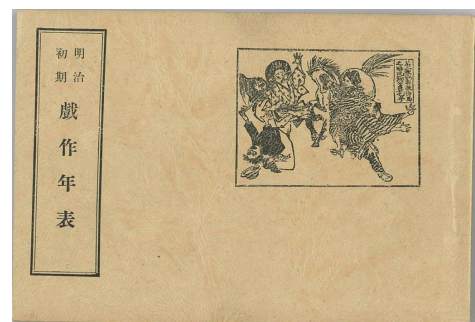
天保改革期合巻表紙



明治期草双紙



明治期草双紙



明治初期戯作年表